

# 小学校低学年のボール蹴りゲームにおける ボールを蹴る動作の習得のための学習指導に関する研究

スポーツ文化研究領域

5011A041-5 外間慎太郎

研究指導教員：吉永 武史 准教授

## 【問題の所在】

2008（平成 20）年 1 月に出了された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善について」答申では、児童生徒に基礎的・基本的な知識や技能を習得させることの重要性が示された。そして、2011（平成 23）年 4 月より完全実施となった小学校学習指導要領では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」

（文部科学省,2008a,p.92）ことが体育科の目標として示された。この目標を実現していくために、基礎的な身体能力を確実に身につけさせることが強調されるとともに、指導内容の明確化と体系化が図られた。「ゲーム」領域および「ボール運動」領域に関しては、各学年において技能に関する内容が具体的に提示されるとともに、学年が上がるにつれて戦術的難易度が高くなっていくゲームを学習するように構成された。しかし、ボール操作技能の困難さから、戦術的課題の面白さから絶縁したゲームが展開されていることが少なくなく、無意図的で偶発的なキックが頻発し、子どもにとってのオーセンティックなゲーム学習がほど遠くなってしまっていることが指摘されている（岩田,2008）。従って、ボールを蹴るという基本的な技能の習得を低学年で保証しておくことはきわめて重要であるといえる。

## 【先行研究の検討】

小学校低学年児童を対象とした体育授業におけるボール蹴りゲームおよびサッカーの学習指導プログラムに関する先行研究について検討した。その結果、ボールの飛距離向上を目的としたボールを蹴る動作の習得のための教材として「隊列ボール蹴り」や「的当て」、「網ボール」（鳥海,1966）や「ホミーボール」（鳥海,1966）、「リボンサッカー」（今井・細江,1987）、「ダイヤモンドサッカー」（清原,1990）などが考案されていた。しかしながら、単元としてボール蹴りゲームの授業を構想した場合、それらの教材がボールを蹴る動作の習得にどの程度有効であるかについては検証され

ていない。また、「タマゴ割サッカー」（林,1990）は空間を狙うということに焦点が当てられているため、ボールを蹴る動作の獲得に焦点を当てた研究であるとはいえない。

## 【研究の目的】

本研究は、小学校低学年のボール蹴りゲームの授業において、ボールの飛距離向上を目的としたボールを蹴る動作の習得に向けた学習指導プログラムを作成し、その有効性について検証することを目的とする。

## 【各章の概要】

### <第 1 章>

第 1 章では、ボールを蹴る動作の構造を明確にし、ボールを蹴る際には股関節の伸展—屈曲および膝関節の屈曲—伸展および足関節の固定が重要であることを明らかにした。また、ボールの飛距離を向上させるにはスイング速度を向上させることが重要であることを、さらに、子どものボールを蹴る動作の習熟過程について、サッカー未経験の子どもがボールを蹴る動作を習得していく上では「助走」、「軸足を置く位置」、「スイング」の 3 つの動作の習得が重要であることを明らかにした。そしてそれらを参考に、低学年の児童を対象とした学習指導において必要な「助走」、「軸足を置く位置」、「テイクバック時の股関節の動き」、「テイクバック時の膝関節の動き」、「フォロースルー」の 5 つの動作の評価基準を作成した。また、作成した評価基準の信頼性を検討するために VTR に収録されている同一の試技映像を 3 人によって観察評価し、その一致率が 85%を超えるまで繰り返し評価を行った。なお、「助走」および「スイング」項目については、再度内容を検討し基準を変更し全ての項目の一致率が 85%を超えた評価基準を作成した。

### <第 2 章>

第 2 章では、教材づくりの基本的視点（岩

田,2010,p.57) や Thorpe (1986) のゲーム修正の原理から教材及び学習指導プログラムの作成に向けた予備的考察を行い、ドリルゲームとして「ボールキープ」と「シュートゲーム」、タスクゲームとして「キック・ザ・ボール」、メインゲームとして「けっ飛ばしゲーム」を作成し、学習指導プログラムを作成した。

作成した以上の学習指導プログラムを、東京都内 K 小学校の 1 クラス児童 38 名 (男子 21 名、女子 17 名) を対象に実験授業を行った。また、その成果を図るために、形成的授業評価および飛距離測定、ボールを蹴る動作の測定を行った。その結果、本研究における学習指導プログラムは、対象となった児童らに好意的に受け入れられ、ボールを蹴る動作の習得に関しても一定の成果を得られた。しかしながら、事後測定において、ボールの飛距離には向上が見られなかったことから、ボールを蹴る動作を身に付けたことがボールの飛距離に対してどのような影響を与えたのかについては十分に説明することができなかった。そのため、学習指導プログラムのタスクゲームおよび成果の測定方法を修正し、ボールを蹴る動作を身につけるための修正プログラムを作成した。

### <第 3 章>

第 3 章では、第 2 章で行った実験の結果に基づいて作成した修正プログラムを適用した実験授業を、埼玉県内 A 小学校の 1 年生の 3 クラス児童 90 名 (男子 46 名、女子 44 名) を対象に実施した。形成的授業評価の結果より、A クラスにおいては、プログラム全体を通して児童が積極的に授業へ参加し、児童自身が成果を実感しながらプログラムに取り組み、仲間と協力する態度も形成されたことが確認された。B クラスにおいては、メインゲームのルールが児童の実態に合わない部分があり、プログラムが進むに従って教材の難易度が高まることで、「成果」次元の評価を下げる結果となった。しかし、プログラム全体を通してみると、児童は積極的に授業へ参加し、仲間と協力する態度が形成されたといえる。C クラスにおいては、プログラム全体を通して児童が積極的に授業へ参加し、児童自身が成果を実感しながら仲間と協力する態度も形成されていた。

飛距離測定を行った結果、クラス間で多少のばらつきはみられたものの、全てのクラスで飛距離の平均値

に有意な伸びがみられたことから、修正プログラムは児童のボールを蹴る動作の習得に有効であったといえる。また、技能レベル別の分析結果からも、上位群に 5%水準で有意差が認められたことから、技能が高い児童に対しても有効なプログラムであるという示唆が得られた。さらに、平均値でみると上位群が 2.85m、中位群が 7.37m、下位群が 11.24m とプログラム実施前に技能が低かった群ほど、平均値に大きな伸びがみられたことから、今回の修正プログラムは技能が低い児童に対して特に有効であったといえる。

プログラム前後における児童のボールを蹴る動作の習得状況を分析した結果、児童の動作得点全体ならびに各動作項目すべてにおいて有意差が認められた。特に、「助走」、「軸足を置く位置」、「膝関節の動き」に関しては平均値が 0.3 以上と大きな伸びを見せた。このことから、修正プログラムでねらいとしていた動作の習得に有効であったことが明らかにされた。さらに、ボールを蹴る動作の習得状況を技能レベル別に分析した結果、いずれの群においても動作得点全体に有意な高まりが認められた。加えて、項目別にみたところ、上位群と中位群は「助走」、「膝関節の動き」の項目が、下位群は全ての項目において有意な高まりがみられた。

よって修正プログラムは、小学校低学年児童のボールの飛距離向上を目的としたボールを蹴る動作を身に付けることを可能にするものであったこと、そして、そのことはその要因となる「助走」、「軸足を置く位置」、「膝関節の動き」、「股関節の動き」、「スイング」の動作の改善によってもたらされた結果であったことが明らかになったといえる。

### 【本研究のまとめと課題】

本研究で作成した修正プログラムは、低学年の児童がボールを遠くへ蹴る動作を身に付けることを可能にするものであった。しかし、本研究では、飛距離を伸ばすことを目的としていたため、正確性を伴ったボールを蹴る技能を身に付けたわけではない。ボールの飛距離を伸ばすことができる技能と、ボールをねらった所へ正確に蹴ることができる技能の 2 つを身に付けることで、中学年で行うラインサッカー、ミニサッカー高学年で行うサッカーへつながる系統的な学習が可能になっていくといえよう。